

## 1.16 松林図屏風

先週、半年ぶりに、上野の東京国立博物館に行ってきました。

この前来たのが春の盛りでしたから、夏、秋と忙しさにかまけて上野の芸術の森から遠ざかっていたことになります。

昔は、東京文化会館が数少ないレベルの高い音楽ホールだったので、毎月のように、ここへ来ていたのですが、今は、至る所に素晴らしい音楽ホールができましたし、各地に個性的な美術館が誕生しましたので、相対的にここに来ることが少なくなりました。

それでも、仙台勤務時代を含めて、春夏秋冬、ほぼ間違いなく、何かの催しで上野駅公園口に降りていたのですが、横浜に帰ってから逆に回数が減ったことを残念に思っていました。

この日は、東京国立博物館が行き先。

冬の割には無風で日差しの暖かい日でしたので、公園口から東京文化会館を通って大噴水までは、かなりの人出でした。

でも、博物館付近は、いつもと同じ落ち着いた雰囲気の中。

この日、博物館まで足を伸ばしたのは、14日まで特別展示されている長谷川等伯の「松林図屏風」を久しぶりに見たかったためでした。

この前、この屏風絵を見たのは、長谷川等伯生誕400年を記念して開かれていた長谷川等伯展。

現役を引いたすぐあとでしたから、3年前の春のことです。

このときは、この屏風と構図がよく似ていて、いろいろと評価が分かれる「月夜松林図屏風」や「枯木猿猴図」なども一緒に展示されていて、世の関心も高く、かなりの人出でしたので、館の開館と同時に入った覚えがあります。

さて、この絵は、しばらく逢わないと何かしら逢いたくなるどこか不思議なところがあるような気がします。

私、この「松林図屏風」にも「月夜松林図屏風」にも、全体としてどこかアンバランスなものを感じているところがあって、そのせいかも知れません。

今回は、等伯は、この屏風図のみでしたが、やはりこの前には、かなりの方がおられました。

私、この屏風図、見る側にも適切な距離感というものが必要で、それが意外と難しいような気がします。

近すぎると、描かれていない霧が見えなくなってしまうし、松葉とも見えなくなる。

遠すぎると、霧の中を漂う感じが消えてしまう。

この絵には、どうしてもこの距離でなくてはというものがあるような気がします。

でも、この日もそうでしたが、鑑賞者の多くは、この距離感など関係がないかのように、絵の正面すぐのところ立ちばかり、この屏風鑑賞の絶好の距離を台無しにします。

こういうとき、私は、博物館側の配慮が少しだけあればと思うのです。もちろん、距離感の置き方には個人の差があるでしょうし、大方の方は、近ければ近いほど良いと思っているのかも知れませんが、この作品との数mの距離は、普通、美術館を訪れるものの必需品ともいべき単眼鏡で問題なく解消されますから、美術館や博物館を訪れ、初めての作品を目の前にする方に対して、この距離感を提示することも、一つの大切なサービスと言えるのではないかと思います。

ところで、この絵に惹かれる理由は何か。

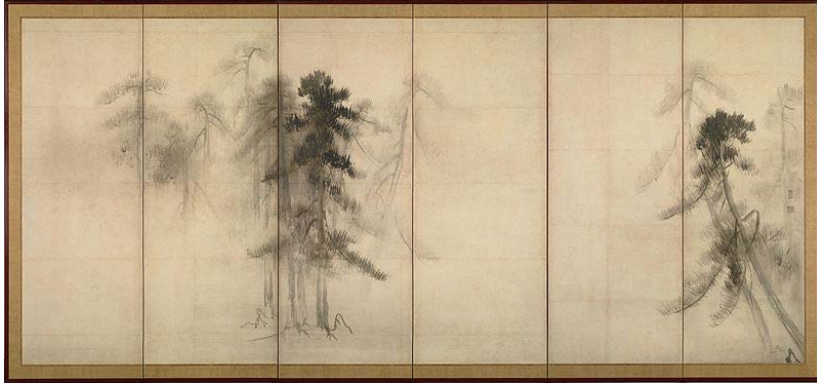
自分の中で、はっきりとわかっているわけではないのですが、このところ、この絵を前にして思うのは、この霧の向こうにあるのは何か、この霧に浮かぶ松の林をたった一人で進んでいく先に、何を見ることになるのだろうか、ということです。

また、何年か経って、私がまだ生きていて、再びこの絵を前にしたとき、自分が何を見ているか、少し、恐ろしいような気もしました。

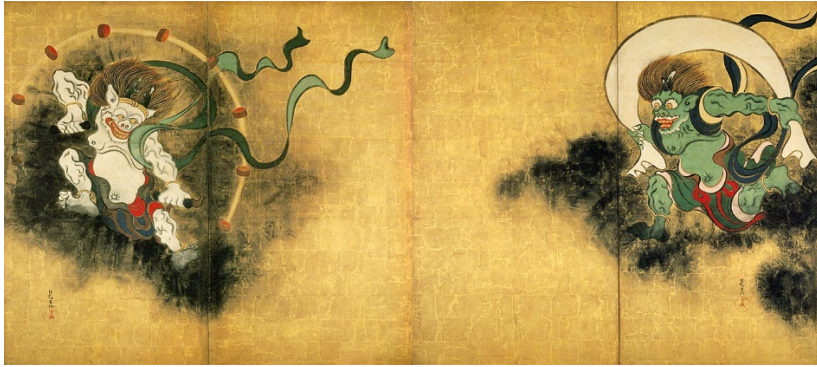
あ、そうそう、今回の展示には、尾形光琳の「風神雷神図屏風」も展示されていました。いつも思うのですが、尾形光琳の絵は、今で言うデザイナーが描いた絵のような気がするのは、気のせいでしょうか。

等伯松林図屏風





尾形光琳風神雷神図屏風



## 2.15 よそ見の雁

今年に入ってからは、そう忙しくはないのですが、ほぼ半月ごとに、短い解説用の頼まれ原稿の〆切がくるものですから、なんとなく気持ちが落ち着かない日が続いています。

新しい考えを提示しなければならない論攷の場合は、下手をすると半年くらいの時間がかかる場合が珍しくないのですが、これまで何度も書いてきたことを依頼に応じて書きかえるのは、そう時間がかかるわけではなく、数日でできる場合が多いのです。

でも、2週間ほど先に〆切が来るということが頭にあると、なんとなく、きちんとした本も読めず、コンサートなどに行く気にもなれず、それでいて集中して短時間で原稿を片付ける気にもなれない。まことに始末が悪いのです。

長年の経験で、こういう時は「まあ、切羽詰まれば何とかなるさ」と思うのが一番。

ということで、〆切期限が迫っていた原稿を放り出して、開催期限が迫っていた「大浮世絵展」に行ってきました。両国の江戸東京博物館です。

なんだ、浮世絵？

と言われると困るのだけれど、

これ、「国際浮世絵学会」創立50周年記念の展覧会。

え、そんな学会ってあるの？

あるんですよー。

といっても、私もつい最近まで知らなかったのですけどね。

この浮世絵展、1月はじめからやっていたのですけど、最近テレビで特集をやったらしくて、見に行く方が多くなってきたらしいのですね。

これ、本音を言わせていただくと、前々から行こうと思っていた身にとっては、メイワクなんですよー。

でも、そんなこと言うと叱られますから、こちらも対応を考えなくちゃあいけません。

まず、こういう時の対応の第一は、出かける時間を選ぶ。これは常識。

狙い目は、開館一番乗りか、お昼の時間。今回はお昼の時間帯を選びましたが、正解でした。並ばないで入れましたもんね。

次は、ちょっとした道具を持っていくこと。

私の場合は、単眼鏡。5 cm程度のものですが、人差し指に引っかけて目に当てると、目の前に行かなくても、細かいところまでよく見えます。

比較的空いている時などは、横着して、部屋の中央に置かれているベンチに座ったままで、みんな見ることができますし、ガラスなどで隔てられて距離がある展示の場合などは、手に取れるほど近くに見えますので、繊細なタッチや細かい彫りなどがわかります。

混んでいるときも、人混みの頭越しに、少し角度を選べばバッチリ見えるのです。

さて、そんなことより、肝心の内容ですが、これは、正直、私、その量に圧倒されました。

総展示作品数は、400点以上。

およそ美術全集で見ることの多い有名作品はほぼ目にすることができます。

ただ、日によって展示しないものがあるので、実際一度に全部を見ることができる訳ではありません。

それでも、展示されているもの全部を見るには、最低でも3時間以上かかりますので、体力勝負です。

作品の傍らに解説版が掲げてありますが、これを読んでいたのではもっとかかりそうですから、今回は、かつて見たことのある作品については解説をパス。

さすがに人気のあるものの前はかなりの人だかりができていました。

例えば、菱川師宣の見返り美人、葛飾北斎の富嶽36景の赤富士（凱風快晴）、歌川広重の東海道五十三次の箱根、雪の蒲原、月に雁、東洲斎写楽の市川蝦蔵、喜多川歌麿のポップンを吹く娘などはやはり人気が高いですね。

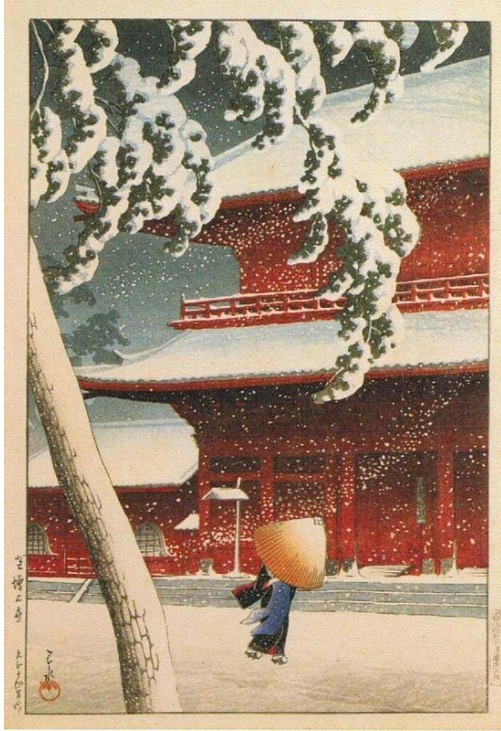
あ、それに、鈴木春信の雪中相合傘。これは、テレビで放映され、心中道行きと解説されたせいか、圧倒的人気でした。

浮世絵は、保存状態が悪いと色が褪せてしまいましたが、さすがに今回展示されたものは美術館が保存しているだけあってすばらしく、とりわけ赤と青が美しく感じられました。

私が今回改めて良いなあと思ったのは、葛飾北斎の黒富士。



それに昭和の浮世絵師なのですが、川瀬巴水の芝増上寺。保存が良く、雪の白さと増上寺の赤が冴えて江戸全盛期に劣らぬ作品だと思いました。



あ、そうそう、広重の月に雁、切手になるほどの有名作品なのですが、今回、よく見ると、三羽の雁の一番上は、首を左に大きく曲げていて、よそ見をしているのですね。私、なぜか、三羽とも首は伸ばしていると思い込んでいました。これ、どうしてでしょうかね。三羽目の雁は何見てるんでしょうね。急降下中によそ見なんかしますかね。



## 2.27 彼のオートバイ彼女の島

昨日、西馬込のある博物館に行ってきました。

極めてマイナーな分野のさらにマイナーな版画家の展覧会の話ですので、興味のない方には全く面白くもないことだと思いますが、その版画家には昔からごく少数のファン(私も含めて)がいて、最近ちょっとだけ取り憑かれた方が増えているらしいので、少しだけ書いてみようと思います。

行った先は、大田区立郷土博物館。

行われていたのは、「川瀬巴水（かわせはすい）生誕 130 年記念特別展」。

川瀬巴水って誰？

20 年ほど前になりますが、ある画廊で、初めてこの昭和の浮世絵画家の代表作「芝増上寺」を見て虜になったときには、まだ私の周りでは誰も知らなかった彼の名が、ようやく世間に少し知られるようになったのは、林望さんの「夕暮れ巴水」という本が世に出たからのような気がします。

（「芝増上寺」は前述した「よそ見の雁…大浮世絵展」に写真を載せておきました）

その後、4 年前のちょうど今頃になりますが、仙台から横浜に戻っていた私は、江戸東京博物館で開催された「川瀬巴水展」を見に行ったことがあります。

このときは常設展示のコーナーでの展示だったせいもあって、博物館に来られた一般の方もその際見ることができたのですが、これは川瀬ファンの増大に大きく影響したようです。

彼のファンになった方の多くは、彼の作品を見て、突然心を驚つかみにされたと感じるようなのですが、作品を見る展示機会が増えることはそのままファンの増大につながるらしいのです。

さて、今回の特別展は、昨年 10 月から今年の 3 月にかけて、前期、中期、後期に分けて、各百数十点ずつ、彼の 600 点余の作品の殆どをカバーする形で行われました。

昨日は、その最終に当たる後期の作品群の展示です。

今回見たかったのは、「増上寺の雪」と「平泉金色堂」。

平泉金色堂は、入り口正面に掲げられていました。

一人の僧が雪の金色堂への石段を上っていく後ろ姿を描いたもので、彼の絶筆です。



物音一つしない澄み切ったしじまの中を、独り、彼の世へと歩む僧に、自分の姿を重ね合わせるのは、私だけではないと思います。

彼は生涯に多くの旅をし、その作品の多くは、旅の空の下、心にとまったありふれた風景をスケッチし、それを元に描いたものであることがよくわかる展示でした。

その風景の多くは、今や失われ、なくなってしまったものですが、私には、どの作品にも、失われていくことがわかっていて描いたとしか思えない、風景への愛おしさが感じられました。

彼の作品の中には、うっかりすると見逃すほどに小さく、人物が描かれていることが多いのですが、このほんの小さな豆粒のように描かれている人によって、私は、その風景の中に自分がいるように思えてしまいます。



人物が描かれていない作品の場合は、人に代わって、暖かい光を点す小さな窓が描かれています。あ、ここには人の暮らしがあると思うことで、私の心は、さすらう旅人にな



ってしまいます。

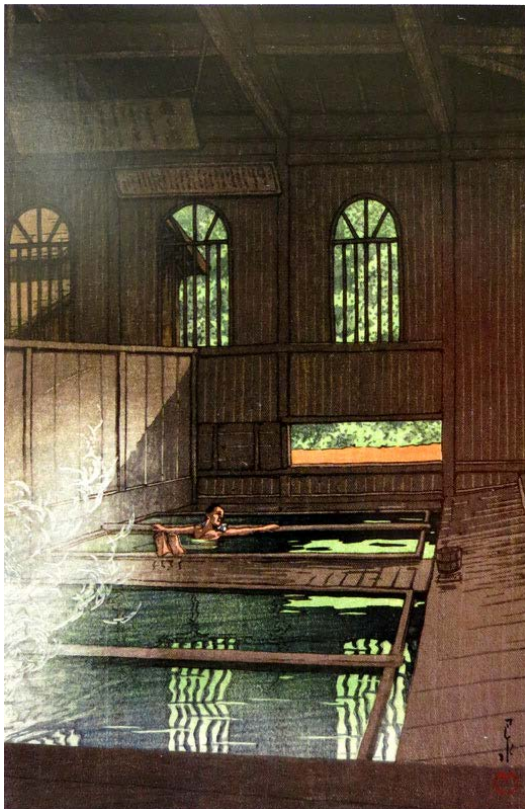
三回にわたって、川瀬巴水のほぼすべての作品を見たことになりませんが、改めて彼が、寂しがり屋で、心やさしい天才浮世絵画家だったことを確信できる展示会でした。

あ、ところで、今回、一つ、私が気がついて嬉しく思ったこと。

それは、彼の作品「上州法師温泉」(下の写真)なのですが、この絵は、昔、私が若い頃見た「彼のオートバイ、彼女の島」の一シーン、彼(コオ)と彼女(ミーヨ)が偶然再会する温泉場のシーンが、そのまま描かれていたことです。

映画では、彼女役の原田貴和子さん(原田知世のお姉さん)が温泉の湯船の中でとっていたポーズもどこか似ていました。(このシーンは、今も You-tube で見ることができます。)

映画のこの場面、撮影場所は法師温泉長寿館だったようですから、大林宣彦監督、間違いなく、巴水のこの作品を見ていたのだと思いました。監督、あなたもきっと川瀬巴水のファンだったんですね。



### 3.13 ヨーヘンテンモク

先日、水道橋のN大で行われた会議のあと、余りにも良い天気なので、都心で昼食をとるのがもったいなく思えて、帰り道、久しぶりにお弁当でも買って、多摩川の川原で食べようと思い、行ってみることにしました。

二子玉川の駅、今はあまり降りないのだけれど、ちょっと行かないでいると、ホントに浦島太郎で、賑やかな駅西口に比べて仕舞た屋が多かった東口は、激変中でした。

堤防に出ようと歩き始めたら、若い女性の二人連れから

「あの一、すみません、静嘉堂に行くのは、何番のバス停ですかー」

「えーと、以前は4番、成城学園に行くバスと同じところだったけど、今どうかな」

「そこですから、ちょっと見てみましょう」、なんてどうせヒマとはいえ、ちょっと親切。

「静嘉堂、今何かやってるんですか？」

「あ、何か国宝のヨーヘンなんとかという茶碗が…」

えっー！！

そういえば、年末にどこかでポスター見たなあ、忘れてたあ。

咄嗟に、私も行くことに決めて、

「あの一、タクシーだと1000円もかからないし、結構バス停で降りてから歩くから、もし良ければ…」

なんて、調子よすぎたかな。

でもね、静嘉堂文庫の「曜変天目茶碗」なんて、そういつもいつも見られるものじゃないし、以前観てからも随分経っているし、次の機会なんて言ったら、死んじゃって居るかもしれないし…。

行きました。

タクシーは800円。バスは210円だから、入口から歩くことを考えれば、こっちの方が早いし、安い。

ところで、平日なのに、結構混んでいましたね。

まあ、今回は静嘉堂が所蔵している茶道具が沢山展示してあって、曜変天目茶碗以外にも、油滴天目をはじめとする私でも知っている高名な茶碗や大名物といわれる茶入などもあったから、茶道に関心のある方々が来られていたんでしょうねえ。

そういえば、和服姿の女性も沢山おられました。

ところで、問題の曜変天目なんですが、

茶碗に興味のある方だとだれでも知っておられるように、世界に残存しているのはたったの三碗。

これは、今回の稲葉天目。

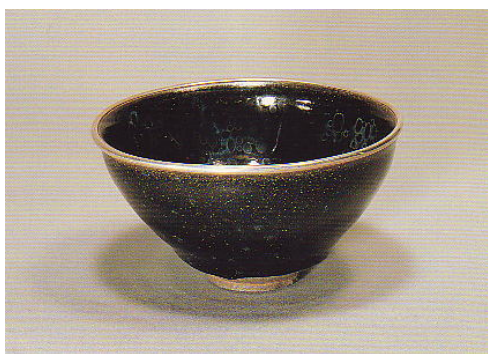


稲葉天目...藤田美術館蔵...大徳寺蔵...京都勤務時代に、仕事をさぼって見に行ったのですが、残念ながら、大徳寺龍光院のものは非公開で、昔確か京都博物館で公開された際行けなかったもので、これはもう死ぬまで無理ですね。

残りは、大阪の藤田美術館と京都の大徳寺にあって、いずれも国宝。

藤田のは、京都勤務時代に、仕事をさぼって見に行ったのですが、残念ながら、大徳寺龍光院のものは非公開で、昔確か京都博物館で公開された際行けなかったもので、これはもう死ぬまで無理ですね。

下左が藤田美術館のもの、下右が大徳寺のもの。



静嘉堂の曜変天目は、伝によると、徳川家光から春日局がいただいて、それが淀の稲葉家に伝わったので、俗に「稲葉天目」。

三つの曜変天目の中で一番派手らしいのだけれど、大徳寺のを見ていないからわからない。

藤田のよりは一見するとインパクトが大きいのは確かです。

私、思うに、曜変天目は、展示の仕方が難しい。

光の当て方によって、これ、同じもの？と思うほど、変わってしまうような気がします。

今回の展示は、正直言って失敗？

といえるほど、何回も見ているわけじゃないけど、

この茶碗、観る角度と光の当たり具合で千変万化するんですね。

私が初めてこの稲葉茶碗に出逢ったときは、幸運にも、周りに殆ど人がおらず、しかも、

やや真上から見る事が出来るほど低く展示されていました。

少し暗いかなと思える光の中で、ほんの少し、身体を動かすだけで、青、藍、瑠璃、縹と変化して、引き込まれそうになる。

宇宙に浮かぶ地球を観ているような気持ちに近いかも知れません。

でも今回の展示では、そのような妖しい美しさは感じなかった。

ちょっと残念。

今回いいなあと思ったのは、灰被天目「埋火」。

以前観たときは、それほどとも思わなかったから、歳のせい？

それともシンデレラ（灰被り姫）の魔法のせい？

## 11.16 源氏物語絵巻

今朝は、早起きして、世田谷上野毛の五島美術館で開催されている「源氏物語絵巻展」に行ってきました。

11月3日からやっていたのですが、時間がとれなかったり、天気が悪かったりで、1週間後の今日やっと行くことが出来ました。

五島美術館は、東急電鉄の創始者である悪名高き「五島慶太」（強盗慶太と呼ばれています）が創設したもので、開館50年を記念しての特別展です。

東京での「源氏物語絵巻展」は、10年ぶり。

ご承知かも知れませんが、「源氏物語絵巻」で現存しているものは、全54帖のうち約1/4にすぎません。

その3/4は、尾張徳川家を経て、現在は徳川美術館が所蔵しています。

残り1/4は、阿波蜂須賀家が所有していたのですが、今は五島美術館が所蔵しています。なお、東京国立博物館が「若紫」の帖を所蔵している等の例外はあるのですが、大半は、徳川、五島の両美術館の所蔵にかかるもので、今回は、この二つの美術館にある全てが展示されています。

開館10分前に到着すると、もう20人ほどの方が待っていました。50人分ほどの待合座席が作ってあって、そこにおとなしく座って、開館を待ちます。

展示は、第15帖「蓬生」から始まって、「関屋」「柏木」「横笛」「鈴虫」「夕霧」「御法」「竹河」「橋姫」「早蕨」「宿木」第50帖「東屋」まで。

絵が19面、詞書36面。

絵は、サイズが、縦20cm強、横50cm弱の小さなもので、ガラス越しに40cmほどの距離のところに展示してあります。

前回は気にならなかったのですが、今回、少し気になったのは、マナーの低下。数人連れのおばさん方が沢山来られていて、それは良いのですが、展示室の中で互いにお喋りをされる。

例えば、こんな具合。

関屋の帖の前で、「あら、こんなところに牛がいるわ。この牛肥満気味ね。足も短い。この横にいる馬に乗っている人誰かしら。この馬も太ってるわねえ。」「ほーんと、ホント」

下の絵は、復元版の源氏物語絵巻「関屋」



ちなみに、牛車に乗っているのは「空蝉」。馬に乗っているのは「光源氏」。  
光源氏さん、きっと苦笑い、間違いなし。

心の中でそう思うのは勝手だけど、声を出すのはルール違反。

さすがに、しばらく経って、美術館側からのアナウンス。

「大変申し訳ありませんが、展示の前で、大きなお声を出すのはご遠慮ください。」

1時間半ほどで、見終わった後は、庭園の散歩。

5000坪ある庭園の中には、石像あり、茶室あり、池あり、山ありです。



お茶をいただいて、まあなかなかいい一日でした。



## 11.17 紫の上の不幸

わが国の三大美人については、一度お話ししたことがありましたが、残念ながら三大美男子というのは話題になりませんね。写真が残っている近代以降については、土方歳三クンとか会津藩主松平容保さんとかが挙げられるようですが、異論も多く、定説はないようです。どうしてでしょうかね。

平安時代まで遡ると、ほぼ伝説や架空の世界ですが、余り異論がないのは、在原業平クンや光源氏さんでしょうかね。

ところで、光源氏さんは、源氏物語の中では美男子として圧倒的存在感を誇ってはいませんが、源氏物語絵巻の中で、光源氏さんを正面から描いているのは、第 36 帖「柏木」三の 1 面だけ（東京国立博物館所蔵の「若紫」も正面像ですが、実物を見る機会がありません）。

残りは、横顔だったり、後ろ姿だったりして、光源氏が本当にいい男だったかどうかは、この 1 面で判断するしかありません。

「柏木」のこの 1 面は、光源氏さんが、自分の正妻「女三の宮」と柏木との間に生まれた不義の子「薫」を、実の子でないと知りつつ抱き上げてじっと見入るシーンです。このとき、光源氏さん 48 歳。写真は、「柏木の三」の光源氏、抱いているのが「薫」。



正直言うと、私には、この顔、冴えない中年太りの男の情けない顔にしか見えません。

もちろん、当時の「引目、鈎鼻、下ぶくれ」の描き方のせいもあるのですが、柏木二で同じように描かれている柏木の顔の美しさと比べると、女三の宮を寝盗られてしまうのも、わかるような気がします。

今なら男の顔は、40 を過ぎてからと言いますが、残念ながら、48 歳の光源氏さんの顔には、かつて一世を風靡した光り輝く貴公子の面影は、どこにも見られません。女性の間を遊び歩いたプレイボーイのなれの果てでは、仕方ないかも知れませんね。

ところで、光源氏さんが、最も愛した「紫の上」も、正面の顔は、第 40 帖の「御法」でしか登場しません。

しかも、このとき、紫の上は、死の直前。

顔色がどす黒いのですね。

写真は、「御法」、右が紫の上、左が光源氏。



夫光源氏さんの果てしない浮気に、悩み抜き、疲れ果てた紫の上は、源氏物語で最も気の毒な女性だと私は思います。

世の女性の皆様、源氏物語を読んでいただければ、イケメンの男性を夫に持つほど苦勞することはないことが分かります。

イケメンの男は、横から憧れているのが一番なんだということを、わが国が生んだ最高傑作は教えてくれているのかもしれないよ。

娘さんをお持ちの皆さん、よく気をつけてあげてください。

まあ、最近の娘さん方は、男が浮気などしようものなら、トットと離婚しちゃうかも知れませんが。